

美人と天才を擁護するドン・キホーテ

2022/03/09



セルバンテスは、まさに、正義と公平の士でした。彼は、世間の平凡な人たちが非難する「絶世の美人」や「学芸の天才」を擁護しました。

絶世の美人が自らの無実を称(とな)えること — 「美人でどこが悪い！」

流浪の旅をつづける騎士ドン・キホーテと従者のサンチョ・パンサが、ある葬式に出会いました。「だれの葬式か？」と訊くと、村人たちは、「この村の若者グリソーストモが村の美しい娘マルセーラに振られて、今朝、自ら死んだのです。そのお葬式です」と答えました。[全集版:前篇第12章57頁]

グリソーストモは、村の資産家の息子で、サラマンカで勉強して村に戻り、学んだ占星術を使って豊作や飢饉の年を知らせ、降誕祭の賛歌も作り、聖体祭の芝居も書き、正直者の味方で、神さまにお礼を申し上げたくくなるような立派な若者でした。そのグリソーストモが村のお金持ちの娘マルセーラに恋をしたのです。この美しい娘は、村の若者みんなから愛されて慕われていましたが、すべての男たちにもものすごい肘鉄砲をくれたので、娘はこの土地に悪い疫病が入り込んだよりも悪い害毒を流すことになりました。村の人たちは、マルセーナを、情け知らずだの、恩知らずだのといいました。

葬式が始まり、グリソーストモの遺書にも当たる彼が最期(さいご)に残した最

後の歌を友人のアンブロジーオが読もうとしたとき、驚くべきことが起きました。グリソストモを死に追いやった当の美しき娘マルセーラが墓穴(はかあな)の上に姿を現したのです。その娘の美しさには、これまで娘を見たことがない連中は驚きで口もきかずただ見上げるばかりで、これまで見慣れていた連中でさえ、上の空になってしまいました。

友人のアンブロジーオだけは、憤懣(ふんまん)にたえない面持ちで、マルセーラに向かって叫びました —

「まるでここいらの山に住む、冷酷な夜叉(やしや)みたいな君は、君の無慈悲のおかげで、あったら命を落したこの哀れな男の傷口から、もしか君の見ている前で血潮が流れ出はしないかと思物に来たというのか、それとも君のもって生まれた性格のむごたらしいしわざを、これ見よがしに誇るつもりで来たのか、さもなければ、無情な第二のネロキドリで、その高いところから君の焼けるローマの火事を見ようというのか、あるいはあの親不孝な娘が父親タルクイヌスの遺体にしたように、この哀れな男の死体を大胆にも踏みつけようとして来たのだろうか、さあ、なんのつもりでやって来たのか、いったい何をしてもらいたいのか、すぐにも言ってもらいたい」

それに対して、マルセーラは、悪びれずに堂々と自己を主張します。これがまた、素晴らしい。ここで、絶世の美女の世間に対する初めての異議申し立てが始まるのです。これまで、いかに、世の中の美人美女が、世間の女たちの嫉妬のおかげで苦しめられてきたか、また、振られた男たちの怨嗟(えんさ:恨み嘆くと)のおかげで悪者にされてきたか、その恨みを晴らすために、美人美女を代表してマルセーラが滔々(とうとう)と美人であることに罪がないことを自ら申し開きをするのです。

この美しきマルセーラの長い訴えは、これまでの文学にも、お芝居にも、なかったものです。少々、長い引用になりますが、美人の声音(こわね)と思って、うっとりとお静かにお聞き下さい。

まあ、アンブローシオさん、わたしはあなたのおっしゃるような、そんなつもりでまいったわけじゃありません。ただわたしは、わたし自身のためにまいったのです。それにみなさんのなやみも、グリソストモの亡くなったことも、みんなわたしの罪になさるということが、どのくらい間違っているかということをよくわかっていただきだきと思っただけでまいったのです。だから、ここにおいでのみなさんに、わたしの申しあげることを注意して聞いてくださるようお願いいたします。

あなた方のおっしゃるところによると、天はわたしを美しい女におつくりあそばしました。それも、わたしの美しさに動かされて、あ

なた方がひたすら否でも応でもわたしを好きにおなりになるほどの
美しさでございました。おまけに、みなさんがわたしにお示しにな
った愛情ゆえに、わたしはいやでもみなさんを愛さなくっちゃなら
ないと、あなた方はおっしゃいましたしお望みにもなりました。わ
たしは、神さまがお授けあそばした生まれつきの理解力で、すべて
美しいものは愛情をさそうということは存じています。それでも、
愛されているからといって、美しいために愛されているものが、自
分を愛している相手を愛さなければならないということは、どうに
も納得できません。

そのうえ、美しいものを愛する当人が醜いということもありがちの
ことでしょうし、醜いものは嫌われるのが当り前のことですのに、「お
前は美人だから俺はお前が好きだ、俺はこのとおりの醜い男だが、お
前はなんとしても俺を愛さなければならん」というのは、ひどく筋
のとおらない言い草です。しかしまた双方とも同じくらい美しい者
同士というような場合にも、それだからといって、別にお互いの気
持も同じでなければならぬとは申せません。それというのも、顔
かたちの美しいものがすべて愛情を誘うわけではないんですから。

なかには見た眼を喜ばしても、心まで動かさないというものもある
はずです。もしもすべてみめうるわしいものが愛情を誘い、人の心
をとらえるものだとしたら、人々の気持ちはどこに落ちついたらよ
いかかわからないままに、五里霧中でさまよい歩くことになるでしょ
う。これは美しい人が数かぎりなくいる以上は、これをもとめる気
持ちもやはり数かぎりなくあるはずだからでございます。

それに、わたしがこれまで聞いたところでは、本当の愛情と申すも
のはけっして分けられるものではなく、これは当人の意思にもとづ
くもので、他から無理に強いたりするものではありません。これが
もしもわたしが信じているようにそのとおりのだったとしたら、どう
いうわけであなた方は、わたしを愛しているとおっしゃるだけで、
そのほかにはなんの因縁もないわたしの意思を無理やりになびかせ
ようとお考えになるんでしょうか？ もしか、そうでないとしたら、
どうかおっしゃってください。神さまがわたしを生まれつき美しい
女にしてくださったように、かりに生まれつきの醜女にしてくださ
ったのでしたら、あなた方がわたしを愛してくださらないからとい
って、わたしが愚痴をこぼすというのは当然のことですかしら？

私の現在そなえている美しさというものは、決して自分で選んだも
のではないということ、考えていただかなければなりません。つま
り、何はともあれ、神さまが恵んでくださったもので、わたしの
ほうからお願いしたわけでも、自分でより好みしたわけでもござい

ません。毒蛇が毒をもっているからといって、たといその毒で人を殺したとしても、それは自然がさずけてくれたものだから、罪を鳴らすわけにはいかないのと同じように、わたしもやはり、美しいからといって罪を問われることはないはずです。それと申すのも、つましい女の美しさは、たとえて見れば遠いところにある火か鋭利な刃のようなものです。そばに近づかない者なら火傷も負わせないし、怪我もさせるわけじゃありません。気高さとか美徳というものは心を飾るもので、もしこれがないとしたら、肉体もたとい美しくっても、けっして美しいとは思われません。ところでもし慎みというものが、人の体や心をいっそう飾りたて美しくする美徳の一つだとしたら、美しさゆえに男にしたわれている女というものは、ひたすら自分だけの快樂のために、あらゆる力をつくし手段を用いて女の慎みをふみにじろうとつとめるような男の意を迎えるために、なんだって自分の慎みを棄てなければならないのでしょうか？

わたしは生まれだちからのびのびと育ちました。だから自由に暮らせるために野山のさびしさをえらんだのです。このあたりの山地の木々が私の友だちです。この辺りの小川の清らかな水がわたしの鏡です。こういう木々や水を相手にわたしの思うことや美しきをわたしは伝えるのです。わたしは遠くはなれた火です、遠くに置いた刃です。これまでわたしの姿を見て恋心をもやした人々に、わたしは自分の言葉で迷いをさまさせてまいったものです。それに恋心というものが希望でささえられているとしたところで、わたしはグリーストモにも、ほかの誰にも、いや、あの人たちの誰一人として希望なんぞもたせたことはないんですから、わたしのすげなさよりも、あの人の思い切れない執拗さが殺したんだと言えらると思います。

それからあの方の考えはけがれの無いものだったということ、それだからあの方の考えに答えなければならなかったのだということ、わたしに責めを負わされるのでしたら、今あの方の墓穴を掘っているちょうど同じ場所で、あの方がご自分の考えの正しいことをわたしに打ち明けてくださったとき、わたしはあの方に自分の考えはいつまでも独りで暮らしたいということ、わたしの世間をさけた生活の果実も、わたしの美しさの残肴(ざんこう:酒宴の残りもの)もこれを享(う)けるものは大地だけだということをお話ししたということ、を申したいのです。

こんな工合にあけすけに申しあげたのに、なおもあの方が望みもないのに、飽くまで我意をはって、風にさからって船をお進めなすったとしましたら、よしんば己が痴情の海原のただ中で沈んだところで別に不思議でもございますまい？ もしもわたしがあの方の心をまどわしたとしたら、わたしは己をいつわっていたのです。もしも

わたしが、あの方をよろこぼせたとしたら、それはわたしの良心や望みにそむいてしたことでしょう。あの方はわたしがきっぱりとおことわりしたのに、飽くまであきらめようとなさらなかったのです。別にきらわれもしないのにやけをおこしたのです。さあどうでしょう、これでもまだあの方の心の悩みをわたしのせいになすっていいものでしょうか！

騙されたものなら嘆くのもいいでしょう、ちゃんと約束した望みが裏切られた男なら、いくらでも絶望するがいいんです。わたしのほうから呼びかけた人なら自信をもつのもご勝手です。わたしのほうで承知した方なら白慢なさるのもいいでしょう。しかしわたしのほうで約束もしなければ騙しもしない、わたしのほうで呼びかけもしなければ承知もしない人に、情け知らずの人殺しのと呼ばれたくはございません。

神さまはまだ今のところ、宿命によってわたしが恋をするというようなことはみ心にはないのです。そればかりかわたしがみずから進んで恋をするだろうなどと考えるのはおよそむだなことです。このどなたにも申しあげる愛想づかしは、どなたでもわたしに言いよる方々のそれぞれのおために聞いていただきたいことです、それに今後は、わたしのためにどなたか死ぬようなことがあっても、それは嫉妬や不運のために死んだのではないとご承知ねがいたいのです。それというのも誰一人愛していない者が誰にしる嫉妬をおこさせるはずはないのですから。あけすけな愛想づかしをさげすみととることはできません。

わたしを野獣とか夜叉とか呼ぶ人は、どうかわたしを人をきずつけるいけない女と思ってそっとしておいていただきましょう。わたしを恩知らずと呼ぶ人は、わたしになんにもなさないことです。わたしを感謝することを知らない女だとおっしゃる人は、わたしとお近づきにならないことです。わたしを不人情よばわりなさる人は、わたしの後をつけまわさないことです。だって、この人非人の、夜叉の、恩知らずの、不人情の、感謝を知らない当人は、それこそ間違っても、そういう方々を求めもしなければ、ご機嫌もとらない、お近づきにもならなければ、つけまわしもしないのですもの。よしんばグリソーストモがみずからあせって、自分の向う見ずな考えから死んだからといって、どうしてわたしの正しい行いや慎み深さに罪をきせようというのでしょうか？

わたしが野山の木々を相手に純潔をたもっているとしても、人間のあいだでもわたしを純潔にしておきたいと思う当人が、どういうわけかわたしから失わせようと望まなければならないのでしょうか？

わたしという女は、ご存じのように、自分の財産をもっているんです。だからほかの方のものを欲しいなどとは思いません。わたしは生まれつき自由な女です。だから他人のいうなりになることはきらいです。誰も愛もしないかわりにきらってもいいのです。この人を騙したり、あの人を求めたりもしませんし、一人の男に恥をかかせたり、他の男といちゃついたりもいたしません。このあたりの村々の羊飼いの娘たちと、ごく間違いのない話をかわしたり、自分の山羊の世話がわたしのよろこびです。わたしの心に浮かぶ願いはこのあたりの山地だけにとどまっています。もしそれがここを離れるとしたら、それは空の美しさを眺めようというときです、つまりそうやって魂がもとの住み家へさまよいゆくのです。

こう語り終えると、彼女はいっさい返事を聞こうともしないで、さっさと背を向けて、ほど近い山のひとしお深い木立の中へは行って行ったが、あとに残ったその場に居合わせた残らずの人々は、彼女の美しさもさることながら、彼女の聡明さにうたれてひたすら驚くばかりであった。そうして、幾人かは今にも女のあとを追って行きそうな様子を示した。これを見るとドン・キホーテは、これこそ苦境にある乙女たちを救うべき、わが騎士道を用うべき好機いたれりと考えて、剣の柄頭に手をかけながら、高らかな大音声で呼ばわった。

「いかなる身分いかなる素姓の者であろうと、なんびとも美しいマルセーラがあとを追うことはお控えめされい。これを犯すときは拙者の烈しい怒りに触れると覚悟さっしやい。あの娘御は明々白々たる十分の条理をつくして、グリソーストモが死については些少の責めも、いやなんらの責めもなく、言いよる男の何びどの思いにも眼もくれず暮らしているということ、明らかにいたされた。これに対しては、後を追ったり苦しめたりされるかわりに、世のありとあらゆる心正しい人々に崇め敬われて然るべきだ。なぜと申すにあの婦人こそは、この世にあってかくも正しい考えを抱いて生きるただ一人の婦人だということ、明らかにいたしているからですわい」

あるいはドン・キホーテのこういう威嚇(いかく)のためであろうか、あるいは友人アンブローシオが亡き友に対する務めを果たすように彼らに言ったからであろうか、墓穴ができあがり、グリソーストモの書き残したものを焼きすて、並みいる人人の少なからぬ涙のうちにいよいよ遺骸を穴の中におさめるまで、羊飼いの誰一人として、その場から動きもしなければ立ち去りもしなかった。

見事です。胸がスーッとします。爽快な気分です。これが、長編小説『ドン・キホーテ』で、セルバンテスが伝えたかったことの一つです。彼は、凡庸な人々が、優れた人たちを、自分と同等の位置にまで貶めて、常識的な言葉

で、あれこれ批判するのに我慢出来なかったのです。特に、下心のある男たちは、自分の心を見透かされまいとして、わざと美人に辛く当たります。女たちは、嫉妬心です。そんな男たち、女たちに対して、ここでは、ドン・キホーテも、セルバンテスも、マルセーラと一緒に、「美人でどこが悪い！」と、悲憤慷慨しています。

天才詩人をあがめるドン・キホーテ — 「天才でどこが悪い！」



Miguel de Cervantes Saavedra, 1547 - 1616

また、騎士ドン・キホーテと従者のサンチョ・パンサが、流浪の旅をつづけていると、一人の立派な紳士が緑色の外套を着て、馬に乗ってやってくるのに出会いました。その紳士は、自己紹介をします。[全集版:後篇第16章396頁]

「わたしは、憂い顔の騎士ドン・キホーテ殿、もしよろしかったら、これから食事にお招きしたいと思っています、ある町に生まれた郷士なのです。わたしは中どころの金持よりいくらか上で、名はドン・ディエゴ・デ・ミランダと申します。家内と子供たち、それに友人たちにかこまれて日を送り、仕事といえは狩りとすなごり(漁)くらいのものですが、鷹も獵犬も飼ってはいないで、その代りよく馴らした鷓鴣(ジャコ)の雛、あばれん坊の白いたち一匹とがいます。ロマソセ語のもの、ラテン語のもの、約七十冊ばかりの本を持っていますが、歴史ものと宗教のもので、騎士道の本はいまだかつてわた

くしの家の戸口からはいつて来たことはないのです。わたしは信仰の書物よりも世俗的な書物をひもときますが、文章の味でたのしませてくれ、創意で感心させ、心をひきつける、健全なたのしみの書物であればいいわけです。もっともそういった書物はスペインには非常に少ないのですけれど」

この緑色の外套の田舎紳士は、なかなかのインテリのようなのです。

「わたしはときおり近所の人々や友人らと会食し、しばしば彼らを家へ招きます。わたしの招待は清潔ですが、量が少ないというわけじゃけっしてありません。かげ口をいうことも好みませんが、ほかの人たちの行動に眼を光らしもしないのです。毎日ミサを聴き、わたくしの財物を貧しい人々に分けますが、いくら慎しみ深い心でもいつしか虜にしてしまう偽善と虚栄という強敵を、わたしの心に入りこませないように、慈善的な行為が目立たないようにしているのです。おたがいに仲違いをしているとわたしが知っている人々を、仲直りするようにつとめているのです。わたしは聖母に深く帰依していますし、われらあるじの主、神の無限のお慈悲に常におすがりしているのです」

まことに素晴らしい人物です。さらに、ドン・ディエゴ・デ・ミランダが、最大幸福として語ったことは、「持って生まれた才能、財産のそれ、多数の友達をもつそれ、多くの立派な子供をもつ幸福にある」ということでした。ドン・キホーテが、いえ、作者のセルバンテスが、もっとも愛する市民の代表です。見事です。これが、長編小説『ドン・キホーテ』で、「市民とはなにか」をセルバンテスが伝えたかったことのひとつです。

その緑色の外套のドン・ディエゴが、ドン・キホーテを見識ある人物だと見込んで語ったことがあります。

「年が十八になる倅を一人もっていますが、わたしが希望するとおりのよい倅でないのです。年は十八になりますが、六年間サラマンカにいてラテン語とギリシャ語を学んでいました。そして、わたしがほかの学問を学ばせたいと思ったときには、詩学に没頭していることを知って（詩なんぞを学と呼んでよければの話ですが）、わたしが学んでもらいたかった法律学にも、あらゆる学問の女王である神学にも、向かわせることはできなかつたのです。わたしは何とかして倅を一族の首長にしたかったのです。というのも、徳義にかなった正しい学問を高く評価する王室の御代に住んでいるからですが、道徳を忘れた文学など、ゴミ捨て場の真珠に過ぎません。一日中、倅はホメロスの『イーリヤス』やマルチアリスの風刺詩やヴィルギリウスの韻文の詮索ばかりして暮らしているのです。そのくせ、現

代のロマンセ語の詩人たちには大して関心がないようです。それでも、近代ロマソセ語の詩に対してあまり愛好を示さないくせに、サラマンカから送ってまいった四行の詩に、《グローサ》をつくるということで、今のところ脳味噌をしぼっていますが、これは文芸競技会の課題だと思ふんです」

ここから、セルバンテスの「文人批判」が始まります。ドン・ディエゴの「詩学息子批判」に対して、ドン・キホーテが答えました。またまた、長い引用になりますが、熱弁を振るうセルバンテスがいかにも、文学の大切さを願っているかがよく分かる文章です。作家の時代批判 — これが、長編小説が長編足る由縁です。しばし、長編小説の真髄である「作者の理念語り」にお付き合い下さい。

「子供と申すものは、あなた、両親の血肉の一部分じゃ、だから、よい子であろうと悪い子であろうと、われらの生命を与えてくれる魂を愛するように、愛さなければならんのです。まだ幼いころから、道徳と、よい躰と、正しいキリスト教の風習の道へ、彼らを進ませることは両親のつとめでござるが、これは大きくなったとき、両親の老後の杖柱とも、子孫のほこりともなってもらいたいからですわい。

ところで、この学問を修めよとか、あの学問を修めよとか、子供らに強いることは、拙者は当を得たことと思いませんな、もっとも彼らに説いてさどすのなら害になりますまい。

学生がパンを稼ぐために学ばないでもよい場合、つまりそれを許してくれるような両親を、天が授けてくれるというようにめぐまれている場合には、なかでももっとも生来の傾向に合うと思われる学問を学ばせてやると申すのが、拙者の意見でござる。

なるほど、詩学は実用というよりたのしみの学問ではあるが、それせ身につけた者の恥になるような学問ではない。詩学は、郷士殿、拙者の考えでは、あたかもいたいけな、年端もゆかぬ、しかもきわめて美しい娘のごときもので、そのほかのすべての学問という娘たちには、この詩学と申す娘を豊かにし、磨きをかけ、飾ってやるのがつとめで、つまり詩学は他のすべての学問をおのれの役に立て、他のすべての学問は詩学によって、権威を高めねばならんのが、しかしこの詩学と申す娘は、いじりまわされたり、町じゅうを引きずり廻されたり、広場の角とか宮殿の片隅などで公開されたりするのが嫌いですわい。

詩学はまことにすぐれた質の錬金でできておるので、扱い方を知っている者なら、評価し得ぬくらいの純粋な黄金に変えることもでき

ましよう。詩をおのれのものにしようという者は、それを正当な範囲内にしっかり保持して、ぶざまな諷刺や、良心のないソネットへ走らせないことじゃ。勇壮な叙事詩とか、悲壮な悲劇とか、愉しい技巧を駆使した喜劇などの形にするのでなければ、どんなことがあろうと、詩は売り物でないことが必要であると恥知らずのべてん師とか、詩の内にかくれておるお宝を知ること尊ぶこともできぬ無知な俗物の手にゆだねてはなりませんわい。

しかし、あなた、ただいま拙者が俗物と呼んだのが、単に下層の卑しい人々のみをさしたと思わずにいただきたい。つまり、ものを知らぬやからなら、よしんば領主であろうが、王侯であろうが、すべて俗物の数に入れてよいし、また入れなければならんのです。そこで、さきに拙者が申した必要条件をそなえて、詩にたずさわる者であれば、その名は世のすべての文明諸国になりひびき、尊敬を受けること必定でござるわ。

さて、尊公は、ご子息がロマンセ語の詩をさほど尊重なさらんと申されたが、これは大いに的をはずれでおいでなさると拙者は思いますわい。その理由はこれでござる。詩聖ホメロスは詩をラテン語で書かなかったが、それはギリシャ人だったからで、ヴィルギリウスはギリシャ語では書かなかったが、それは彼がローマ人だったからでござる。つまり、古代の詩人たちはいずれも、母親の乳とともに覚えた言葉で詩を書いたのであって、おのれの思想の高さを吹聴しようと外国語を借りにゆくことはなかったのじゃ。

かような次第で、この風習があらゆる国々にまでひろがることも、ドイツの詩人がその国の言葉で書いたからといって、カステイーリヤの詩人どころかビスカヤの詩人がその国の言葉で書いたところで、さげすまれないというのが道理でござろう。しかし、拙者の想像でござるが、ご子息はなにもロマンセ語の詩がおいやだというよりも、ロマンセ語一点張りで、生来の作詩衝動の飾りともなり、これをめざまし、助長してくれる外国の言葉も、他の学問もご存じなしの詩人連がいやだと申すのでござろう。

だが、これにも誤りがありそうじゃ。と申すのは、まことに真実を伝える説でござるが、つまり詩人は生まれるものと申すのじゃが、その言わんとするところは、天性の詩人は母胎を出るとき、すでに詩人でござって、天から授かった傾向によって、そのうえ学ぶことも、技巧を加えることもないままで、「神われらがうちにあり云々」と申した詩人をなるほどと思わせるような作品をものするからでござる。

さらにまた、技巧に助けられた天性の詩人は、単に技巧のみを知って詩人のつもりでいる者より、はるかにすぐれ、立ちまさと、拙者は申したい。その理由は、技巧は天性にまさるものではない、天性を完成するものだからでござる。されば、天性に技巧が加わり、技巧に天性が加わってはじめて、完璧の詩人が現われるのでござろう。

そこで、郷士殿、拙者の申したことの結論として申しあぐるが、そこもとはご子息を、その宿星が招く道へと進ませられるがよい。ご子息はかならずやそれにちがいないが、すぐれた学生であって、すでに語学という最初の段階をまんまと登られたのであってみれば、その語学を力にして、単身で人文学の頂点をきわめられることでござろう。この人文学は普通の合羽(かっぱ)と剣の紳士にほいかにもふさわしいもので、主教の僧帽のように、もしくは法学者のガウンのように、その人物をひき立たせ、名誉を与え、偉容を加えるものです。もしご子息が他人の名誉をきずつけるような諷刺詩を作られたら、そこもとはお叱りなさい、いや、罰を加えて、作品はお破りなさることじゃ。しかし、ホラティウス風の訓戒詩をつくって、あの詩人があれほど気品高きうたったように、一般的に悪徳をそのなかで非難してあったら、大いに称賛しておやりなされ。と申すのも、詩人がねたみ心を非難して書き、詩のなかでねたみ深い人のことを悪しざまに書くことは立派なことで、これはその他の悪徳についても、なんら特定の個人を指さないかぎり同断でござる。

とは言え、悪口を言いたいばかりに、ポント島へ追放される危険をおかすような詩人もおりますわい。もし詩人の日常が清潔なら、その作品も清潔でござろう。ペンは心の舌でござる。心の中にはぐくまれる思想が高ければ、作品もまた高いものができるのです。そこで、国王や王侯が、思慮もあり徳もそなえ、真面目な臣下に、詩学の稀才を見出したときには、これを尊び、これを富ませ、さらに、雷も犯さぬと伝えられる木の葉の冠さえ戴かせるものじゃが、それは、こういう冠でひたいを飾り栄光を与えた詩人らが、何人からも犯されることはないというしるしでござるよ」

緑色の外套の騎士はドン・キホーテの演説にすっかり驚嘆してしまいました。見事です。この「文学論」もまた、長編小説『ドン・キホーテ』で、セルバンテスが伝えたかったことの一つです。先の「美人について」と同様に、今度は、「人文学者」を褒め称えます。これは、セルバンテス、ご自身のことであります。この世には、こういった、非凡なことは非凡だ、優れているものは優れている — と当たり前のことを当たり前に言う「場」として小説があるのです。素晴らしいです。小説は、読むべきです。

「醜女」(しこめ:不美人の女)を見事に描くセルバンテス —「東洋の真珠、野に咲いた花!」

「美人」を擁護したセルバンテスは、今度は「醜女」を登場させます。[全集版:後篇第47章548頁] これも、「小説」が果たす役割かどうかは分かりませんが、微に入り、細に入って、「醜女」の容姿・容貌を詳しく滑稽に描いて見せます。なぜ、わざわざ、「醜女」を題材にしたかと言え、それはそれ、『ドン・キホーテ』が滑稽文学であるからです。その経緯(いきさつ)は、エッセイ「知恵者サンチョ・パンサ」の項目で詳しくお話ししましょう。そちらをご覧ください。

都築正道